

父の手

奄美市立朝日小学校 六年 牛ノ濱 うしのはま しずか 寧香

小学四年生の紬は、父の手が嫌いだ。紬の父は大島紬の泥染め職人で、何度も布に泥をもみこむ作業をしている。だから、いつもツメの中まで真っ黒だ。お風呂に入ってもなかなか落ちない。ひそかに眉をひそめる紬に母は「お父さんの手は頑張っている証」と、よく言っている。しかし紬にとって、その「証」は半信半疑だ。

ある日、紬が勉強をしていると、ガッシャーんと、隣の部屋から大きな音がした。行ってみると父がぼう然と立っていた。紬の友達からもらった大切なマグカップが割れていた。

「紬、ごめん。なんとか直すから。」

必死に謝る父の声は、動揺から怒りに変わった。紬には届かない。

「何で。友達からもらった大事な物なのに。」

涙を浮かべながら、強い口調で父を責める。申し訳なさそうにだまっている父を、紬はさらに責めたてた。

「もう、わざとじゃないんだから、それ位にしときなさい。」

母が父をかばう。母も私の気持ちを分かってくれない。紬は勢い余ってこう言った。

「なによ。家族の事より仕事ばかり優先して。だからいつも手だって汚いんでしょ。」

父は、そのまま奥の部屋に姿を消した。しまった、言い過ぎた。謝らなければ、と思ったが、どうしても勇気が出ない。とうとうその日は、父と言葉を交わすことはなかった。

次の日、学校へ行くと、あるプリントが配られた。「体験学習！Tシャツ泥染め」教室中が歓喜と期待でざわついた。先生が、

「講師は、紬さんのお父さんですよ。」

思わず息をのんだ。最悪だ。そうぽつりと言った紬の一言は、盛り上がる教室にかき消された。その日から、学校の授業も何もかもが嫌になった。どうしよう。

体験学習の準備は教室で行われた。白いTシャツの、模様をつけたい部分をしばって染める。「絞り染め」という技法だ。準備が終わった次の日、とうとうその日ってきた。あれ以来、父とは話していない。背の大きな級友の陰に隠れてバスを降りた。案の定、父が工房の前にいる。全員そろくと、今日の段取りを説明した。まず、赤紫色のシャリンバイを煮出して作られた染料にシャツをつける。その後、泥田に入って泥でシャツを染める。

泥染め体験の中でこれが一番大変だ。踏みこむ回数が多い上、泥で足元が見えないから、友達から何度も足を踏まれるのだ。しかし苦労した分、最後までやり切った達成感は大きかった。輪ゴムを外した後の染まり具合もとても良かった。一つとして同じ柄のものはない。

完成した後、初めて私は泥染めの素晴らしさと大変さが少しは分かった気がした。たくさんの手間ひまをかけて作られている。お気に入りのTシャツはすぐに持って帰らなかったが、父は全体に、

「泥の色をシャツに定着させなければならぬから、一週間くらいここで乾燥させてから学校に送るよ。」

と説明した。せっかくの柄が落ちたら大変だ。紬は、何度洗っても落ちない黒いツメのまま、握りしめたシャツを無言で父に手渡した。

早く母に今日の話をしたくて、走って帰宅した。すると、なんと母が倒れて病院にはん送されていた。軽いめまいらしい。精密検査が必要なので即入院となった。病室では、案外、元氣そうだったので、今日知った泥染めの楽しさ、素晴らしさを話した。すると、母は紬の名前の由来について教えてくれた。

「紬の名前は、お父さんが一生懸命考えてくれたんだよ。シマの伝統文化を、人々の思いを、後世につむいでいてほしい、ってね。」

紬は何も言えなかった。父が私のことを、そんなふうに思ってくれていたなんて。ふいに病室のドアが開いた。父があの手でカップを持って。割れ目がきれいにつながっている。これならば、まだ使えそうだ。私の方へ父が近づいてきた。「紬、ごめん。」と、また謝られた。紬もすぐに立ち上がって、

「お父さん、ごめんなさい。思ってもいないことを言ったの。」

父はうなずいてマグカップを差し出す。私はそれを受け取ると、自分の心の中で思っていたことを父に伝えた。

「私は体験学習で思ったことが二つあるの。一つ目は、お父さんのその泥で汚れた手は、誇り高い、職人の手だ、ということ。二つ目は、私は、自分の名前の由来通りに、シマの伝統や文化、そして人々の思いをつむぐ、お父さんみたいな手を持つ職人になりたいの。」
伝えた後、二人は顔を見合わせてびっくりした。それからすぐに満面の笑みに変わった。それは、私の「決意表明」に向けた笑顔だった。翌日、母は退院した。紬は早速、父の工房へ行く許可をもらった。今日から勉強だ。大好きな父の手からたくさん学ぼう。